

「新しい時代の贈り物」

速水 智子

<http://www.hayamizu.jp>

新しい時代の「贈り物」はいつもわたくし達の気づかぬうちに戸口にそっとおかれていくのではないのでしょうか。

経営の神様と言われたドラッカーによると、世界で最初の経営セミナーは、1882年ドイツの郵政庁によって行われたものでした。企業のトップを対象とした「電話を恐れぬ方法」セミナーは、驚いたことに「電話は事務員が使うべきものだ」という理由で招待した人々を怒らせてしまい、参加者はなんとゼロであったということです。「電話を恐れぬ方法」から1世紀余り過ぎた今では、電話の存在を疑う人もなく、今のわたくし達にとって微笑ましいエピソードとなりました。

今から10年前、私が「インターネットセミナー」をつくばで企画した時、わずか30名の参加者を募ることさえ、たいへんでした。先端科学の街、つくばといえどもその頃、電子メールのアドレスを名刺にのせている人はごく限られた人達だけでした。インターネット上の巨大仮想商店街の“楽天”も検索ソフトの“グーグル”も生まれていない時代だったのです。当時のセミナーはホワイトハウス(クリントン大統領)、首相官邸(村山首相)と次々と説明をしながらの研修でした。そして表示するための待ち時間の長さと同線の不安定な状況は綱渡りセミナーと呼びたいほどのものでした。しかも終わってからの場の雰囲気は「なんだかよくわからない!」というすっきりしない空気に包まれており、私にとって意気消沈した企画であったことが今ではなつかしく思い出されます。

このように近年になって私たちの目の前に突然登場したインターネットもすでに道路(ブロードバンド)から広場(交流)へと変化していると言われていています。現在ビジネスの世界でメールのアドレスを持たない人を探すことは難しいことですし、すでに企業活動においてITは不可欠な存在となりました。日本は速い回線と安い料金で、今や世界で最高レベルのIT環境をほこる国となったのです。

しかし一方ではこのようなあまりにも急激な技術の発展は、高齢者を始めとする多くの人々に恩恵よりも不安感を与え、時代に取り残されるような焦燥感や疎外感をもたらしていることも事実です。全ての人に等しく新しい時代の「贈り物」が行きわたり、社会となじみ、そして生活と調和するまでにはもう少しゆるやかな時の流れが必要なのかもしれません。しかし、私はあえてこの“急激な変化”こそが新しい時代精神を生み出すための原動力となり「贈り物」を早く受け取るための絶好の機会になりえるととらえています。なぜならこの「贈り物」こそかつてのような便利さを追求し成長、拡大を志向させるものと

は異なる、人間本来の存在に立ち戻るためにそっと戸口におかれたものではないかと思っていますからです。つまりこれまで社会的弱者と言われていた人々に温かな光をあてながら、個人の資質を高め、その存在をより確実にする力を秘めているのです。すでにパソコンやデジタル機器の開発は、障害のある人々が自立的に社会参画し仕事をえる道をひらき始めています。電子メールや携帯電話はお年寄りに安全や人とのふれあいをもたらすコミュニケーション機会を増やしました。また時間と空間を意識しない環境はこれまで家事や育児のもと十分な社会活動が制約されていた女性たちに、自己実現と多様な働き方のチャンスをもたらしています。このように新しい社会は多様な人々に温度差を生じさせながらも、新しい秩序や新機軸の新風を巻き込みながら社会を進化させていくものと思われます。その時初めて「贈り物」の真の力が発揮されて実像が徐々に現れてくるのではないかと思います。幸運にも私たちはこの時代に遭遇しこの「贈り物」を手にすることができました。未来の人々にも評価されるような、知的で健全な時代精神を育むことが今を生きる私たちに求められていることではないでしょうか。

2006年2月